

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

気になるあの娘は  
魔法少女

伊吹泰郎

表紙イラスト：明地雷



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『気になるあの娘は魔法少女』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



気になるあの娘は  
魔法少女

伊吹泰郎  
表紙 / 明地雷

## 登場人物紹介

### Characters

---

しば たりゅう

#### 柴田流

外見も学力もごく平凡ながら、真っ直ぐな心根の少年。

しい なあおい

#### 椎名葵

優等生で人当たりがよく、真面目で勉強もスポーツも得意。ただし、融通が利かないわけではなく、それなりにユーモアのセンスも持っている。実は異世界から魔法の修行にやってきた魔法少女。

えのもと かほ

#### 榎本夏帆

突然葵たちの前に現れ襲いかかってくる謎の少女。絵に描いたような幼児体型で、髪型はショートカット。葵と同じく魔法少女。

少年——柴田流の両目は、驚きで飛び出さんばかりに開いていた。

彼の前にいるのは、クラスメイトの少女、椎名葵。

葵が纏うのは、袖口や裾にフリルがついた白くて丈の長いワンピースと手袋、ブーツだ。フリルは淡い水色で、青みがかった丸い宝石が胸元と手の甲を飾っている。

そして、両手に握られた材質不明の透明な二丁拳銃。

ほんの十数秒前、葵は学校指定のブレザーからこのコスプレじみた姿へ、一瞬で『変身』したのだ。

それだけでも少年の現実感揺さぶられるのに、葵は彼をかばって、四方から迫る生きた泥人形の群れと戦っている真つ最中。

葵の動きは軽やかにステップを踏むようだった。

時には銃口を左右へ向けて。時には正面の集団を撃ちまくり。

泥人形達は爆弾でも投げつけられたかのごとく、次々に四散する。

(何だ!? 何だよっ!? どうなってるんだ、これっ!?)

常識はずれの展開に、流の頭は破裂しそうだった。

ついさっきまで、自分のごく普通の学園生活を送っていたはずなのに。

気になる女子と二人きりという甘酸っぱいシチュエーションで、ドギマギしていただけないはずなのに——。

※ ※ ※ ※ ※

「すっかり暗くなっちゃったな……」

最後のプリントをホチキスで留めた流は、教室から窓の外を眺めて呟いた。

今の季節は秋になりかけといったところ。

まだそれほど涼しくなくて、流も上に着ているのはワイシャツだけだ。しかし、一旦陽が沈みだすと、夜までが早い。

日直だった流は、クラス日誌を職員室へ届けたところで担任に捕まり、資料作りをしていくよう指示されたのだ。結果、かなりの時間を取られてしまった。

もつとも、不満などなかった。彼が感じていたのは、主に緊張と照れくささである。

理由は単純明快。同じく日直をしていた葵と向かい合つての作業だったから。

「お疲れ様でした、柴田君」

「おう……っ、権名も、お疲れ」

葵はこの春からの転入生で、二年に進級して以来、流がずっと意識してきた相手だった。席が隣同士なのでそこそこ親しく、告白できないかと考えたことも何度かある。

とはいえ、彼女と普通に接していられるのは、他の友人を交えている間だけ。二人きりになると、おおげさなほど身構えてしまう。

何しろ葵は、成績優秀でスポーツ万能の、上に超が付くような優等生なのだ。

7

身体つきだって、全体的にスラリとしつつ、出るべきところがバランスよく出ている。水泳の授業時など、女子の中からも見とれる者が続出するという噂である。

さらに顔立ちも品よく端正で、背中まである長い黒髪が、清楚な令嬢めいた雰囲気とマッチしていた。

「あ、後はこの資料を先生に渡すだけだよな。次の用事を言いつけられないように祈ろっぜ」

「ふふっ、渡した後は大急ぎで逃げちゃいましょうか」

「……そう、だな」

これほど完璧なのに、葵は偉ぶることさえない。

ですます口調で喋ることが多いものの、他人行儀な感じはなく、むしろ物腰の柔らかさが目立つ。

加えて濃い琥珀色の瞳にあるのは、どこまでも優しげな煌めきだ。

対する流の方は、そこそこ友人の多いタイプながらも、異性と付き合った経験はゼロ。顔は十人並だし、成績も決して自慢できるレベルではない。

これで気後れするなというのは無理な話だろう。

今日も葵と連れだって教室を出た辺りから、会話が続かなくなってしまうた。

(な、何か話のネタは……って俺、他のヤツと一対一の時は、どんなことを話してたっけ?)

基本的なことなのに、度忘れしてしまう。

結局、どもりがちに口からこぼれ出たのは、ひどく野暮ったい質問だった。

「……権名ってさ、休みの日とかはどうしてるんだ？」

「わたしのしていることですか？ ええと……」

小さく首を傾げる葵。

「大抵はボランティア、みたいなことですね」

「ボ、ボランティア？」

予想外の答えに、流は驚いた。

「すごいな。人助けか……」

思わず感嘆のため息が。と、葵は慌てて手を振った。

「いえっ、そんな立派な内容ではないんです。わたしの場合は勉強を兼ねていますから……」

……

「ん、もしかして介護の練習とかか？」

将来は福祉の仕事にでも就くつもりなのだろうか。

「そ、そうじゃなくて……ボランティアっていうのは言葉の綾で、わたしはただ自分の成

績に繋がることをしているだけなんですっ」

「え？ 成績って？」

「あ……」

しまった、というように葵は口をつぐんだ。あまり突っ込んで聞かれたくないことらしい。  
(「まずい質問、だったのか?」)

心配になる流。

だが、ちょうど職員室の前まで来ており、雰囲気気まぜくなることはなかった。

「あーと……失礼しまっす」

敢えて陽気な口調でノックしてから、少年はドアをガラリと勢いよく開けたのだった。

職員室ではすんなり解放されて、教室へ戻る途中、今度は葵が聞いてきた。

「柴田君こそ休日はどうしているんですか?」

もう先ほどのやりとりなど気にしていないらしい穏やかな口ぶりだ。

流はホツとしつつ、答えた。

「俺は友達と遊びに行ったりだな。ゲーセンで対戦したり、どっかの店で駄弁ったりとか

さ」

「あ、納得です。柴田君、クラスでも人気がありますから」

人懐っこく笑う葵。しかし、彼女にそんな評価をされるとくすぐったい。

「そ、そりゃ椎名だろ? 椎名こそ、クラスの人気者じゃないか」

途端に葵も頬を赤らめた。

「そう、でしょうか。でも……柴田君にそう褒めてもらえるのは、嬉しいです」  
「えっ？　そうか……？」

話はそこで少し途切れるが、今度の沈黙はどこか心地よかった。  
程なく教室へ到着し、流と葵は各々の机から鞆を取る。

（……よし！）

せっかくいい雰囲気なのだ。ためしに葵を誘ってみよう。

「あのさ、椎名……この後、途中まで一緒に帰……」  
だが、最後までは言えなかった。

「あーあ、葵ちゃんってば青春してるのねえ。あたしってばお邪魔虫。ほーんとごめんね  
え？」

舌足らずな声が割り込んできたのだ。

「え……？」

反射的にそちらへ目をやれば、ドアのところに見慣れない少女が立っていた。  
歳の頃なら流や葵と同じぐらいだろう。

とはいえ、背は葵よりずっと低く、小学生の集団に入ったら、あっさり紛れてしまいそう。  
全体的な発育もそれと同レベルで、胸もお尻も真っ平らだ。

髪は健康的なショートカット。

そのくせ、あどけない顔へ浮かぶ笑みは、一目見ただけで、『いじめっこ』という単語を流に連想させた。

着ている紫の服も妙に露出度が高く、さながらセパレートの水着といった感じ。腰回りは丸見えだし、パンツは脚の付け根すれすれまでしかない。

服の胸元や手袋には大きな黒い宝石がはめ込まれていたが、アクセサリーとしてはひどくアンバランスだ。

しかも、辞書のような分厚い一冊の本を左手に携えていて。

「ふふっ、そっちの彼は初めましてよね。あたしは榎本夏帆。葵ちゃんと同じ魔法使いの見習いで、昔からの腐れ縁だったりもするのよ」

「何だって……？ ま、魔法……？ 見習い？」

思わず間の抜けた表情で聞き返してしまう流。

一方、葵は非難するように声を荒らげていた。

「夏帆さん！」

彼女がこれまでこんな風に怒るのを、流は見たことがない。

だが、夏帆は平然としていた。笑みもいよいよ人を小ばかにした色を帯びていく。

「仲良しなら教えてあげればいいじゃない。あたしも葵ちゃんも、こことは違う世界から

修行のために来た魔法使いの見習い——魔法少女なんだって」

「ま、まほお少女だつてえ？」

あまりといえばあまりな単語で、呆気を取られてしまう。

(こいつ、どこかおかしいのか……?)

とはいえ、隣では葵が大真面目な顔をしていた。

困惑する少年に、夏帆はクスクス笑つてみせる。

「そうなのよお。あたし達は見習いだから、人助けとか勉強とかで成績を上げなきゃならぬの。でも、これって実力重視の業界だし、一番手っ取り早いのは競争相手を潰して、魔法の世界へ無理やり送り返しちゃうことなのよね。ほおら、こんな風に♪」

夏帆が本を開き、ページの一部を指先でなぞった。

と、教室内のあちこちの空間が、陽炎さながらに歪みだす。

歪みは凝縮し、密度を増し、色を濃く変えて、最後に屈強な人型として実体化した。その表面は茶色くデコボコし、まるで泥を固めたかのようにだ。

明らかに人間ではない。

そんな化け物が、十も、二十も、三十も。

オオオオ……!!

オオオオ……!!

少年の前では、葵が狂ったように長い黒髪を振り乱した。

「こ、このままっ……っあっ、やるからなっ！」

「は……いっ……な、流君のものをっ……いっばい動か……く、ううんっ……動かして  
くださいいっ！」

男女問わずに人気の的で、自分も密かに恋してきた相手で、さつきまで華麗に戦っていた美少女。なのに、今や男根で貫かれて、見境なしによがっている。

そこに流は征服欲をそそられた。

「葵っ……もっとはつきり言ってくれっ！ 俺のっ……何でかき回してほしいんだ!？」

「お……おちんちんっ……おちんちんっ……ですっ！ 流君のおちんちんでっ、かき回してほしいんですううんっ！」

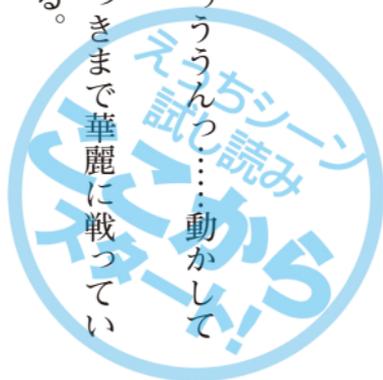
「よお……しっ！」

エラが外まで抜け出す寸前で腰を止めて結合部を見下ろせば、極小の陰唇が怒張を啜える様は、ひどく背德的だった。いかにも性感帯へ作り変えられている途中。

剛直には破瓜の血が付いていたが、すでに愛液の方が圧倒的に多いのだ。おかげで赤みには、淫靡なテカリが上塗りされている。

「葵のおマ○コっ……すごいことになってる……なっ！」

流はヌルヌルの腰を掴む手に力を入れて、ジュブズブッ！



再び挿入へ動きを変更した。

「んはあああつ！ ひうつ……また、来てええあああつ!!」

「くおおつ！」

離れたばかりだというのに、媚肉の群れは再びすぼまりかけていた。そこへ勢いよく突っ込んだ亀頭は、隅から隅まで遠慮なしに揉み解されてしまう。

そして淫らな蠕動の後は、弾力のある子宮口と衝突だ。

「あ……うああつ!!」

少年は呻きつつ、腰を後ろへ。

こんなピストンでは、きつとすぐにイッてしまいうだろう。だが、セーブするぐらいなら、いけるところまで突っ走れたかった。

ズプッ！ ジュポッ！ スポッ！ ゲポッ！

美少女の膣肉を踏み荒らし、打ち抜かんばかりに子宮口を抉る。

下腹部と尻のぶつかる音もパンパンと大きくて、スパンキングさながらだった。その間で媚薬が飛び散ったり、糸を引いたり。

まだまだ稚拙な動きでも、官能の摩擦は物凄い。未熟であるがゆえに、加減を知らない。

「ふああああつ!! やつ……そこつ、今当たったところつ……いいですうううつ!!」

「こ、ここ……かつ!! うおつ!!」

ねだられた場所へ流が逸物を打ち付けると、動きに捻りが加わって、亀頭があらぬ方向へ擦られる。

熱くて、ひたすら熱くて、汗も止まらなかつた。

「おちんちんっ……おおきなおちんちんううっ！ わたしをいっぱいにしてますううっ！ うあああんっ！ 暴れてつますううっ！」

葵も身体をガクガクさせている。湿って重みを増した衣装の裾は、揺れ幅が大きく、まるで振り子さながらだ。

彼女は無茶な律動のみならず、自分のコスチュームにまで翻弄されているかのようにだつた。

ドクン！

「ああおっ!!」

不意に流の肉棒は大きく脈打ち、奥から精液の群れがこみ上げてきた。

尿道を内から広げる切迫感に、頭の毛まで逆立ちそうだ。

悦楽も爆発的に高まって、それがさらに少年を追いつめる。

「出そうっ……だっ！ 俺っ……これ以上は……も、もう持たな……いいっ！」

吠えた刹那、葵が大胆に尻を押しつけてきた。

「う、ああおっ!!」

先端から根元近くまで搾られる剛直。咄嗟に股間を引き絞るものの、精液はその堰すらも打ち破らんばかりだった。

「あ、お……お、おお俺え……っ……っ……！」

うわ言じみた唸りを漏らす流。口はさらにパクパク動いたが、もう意味のあるセリフが思い浮かばない。

そこへ葵が懇願をかぶせてくる。

「流君っ、ながっ……れっ、うあああん、流くううんっ！　どうか最後までっ、わたしの中においてくださいいいいいっ！」

「い……おっ！」

どうやら途中で流が離れてしまわないか、不安になったらしい。

「おおおっ！」

少年は反射的に前へ倒れ、魔法少女を抱きすくめていた。さらに大きなバストを鷲掴み。途端に掌中へ美乳の重みが広がった。

二つの膨らみは柔らかさも相当なもので、軽く押すだけで美麗なラインがクニユツと歪む。表面に付いた粘り気のため、溶けだしているようにさえ思えた。

「ふひゃあああっ!!」

新たな刺激に、葵もつんのめりかけていた。水タンクへしがみつこうにも、手や腕は又

ルヌル。相当に危なっかしい状態となってしまう。

だが、蠱惑的な感触と声に流は発奮させられた。

大丈夫だ。踏ん張れば、射精までもう少し時間をかけられる。

胸だつて、もっと堪能したい。同性をも魅了する可憐なバストを、今は自分が独占しているのだ。

「葵っ、お前の服っ……どう脱がせればいい!!」

忘れかけていた人の言葉が、自然と喉から迸る。

と——ビリビリッ!　ビリイイッ!

いきなり魔法少女のコスチュームの前が縦に裂けた。

「いっ!!」

ギョツとなるが、その理由ならすぐ判明した。

「こ、これでっ……いいですかっ?!　流……君っ!」

葵が魔法で何かやったのだ。

「そっ……だっ!」

短く返事をしつつ、流は胸が高鳴りだした。サディスティックな興奮が芽生え、みるみる膨張してくる。

しかし、魔法にはまだ続きがあった。

ビリッ！　ビリッ！　ビリッ！

胸元どころか、衣装はそこら中が破け始める。

右の肩口が千切れて、細い二の腕が丸見えになり、括れた脇腹の上には大穴ができた。流の胸や腹の下でも、背中回りがズタズタになっていく。

あたかも大勢の透明人間が、少女を陵辱しているようだった。見えない手で、指で、可憐な衣装をボロ布同然へ変えていく――。

「な……ああんっ！　どうしてええっ!!」

葵自身までが困惑の喘ぎを垂れ流していた。もしかしたら、肉欲に振り回されて力を制御できなくなっているのかもしれない。

（ま、魔法ってすげえっ!）

流も調子づき、最初にできた裂け目へ指を引っかけた。

ジイイイ――ッ！

自らの手で、破れ目をさらに大きく変えてやる。

「ふあっ!?　いやあああっ!!」

葵がすすり泣いても、容赦しなかった。

「本当に嫌なのか、葵っ!」

追及すれば、少女もぶんぶん首を横へ振り、

「いえっ……いいえっ！ 流君から乱暴にされるのっ、素敵ですうううっ！」  
 被虐的な本音をあっさり暴露。

「葵はいじめられるのが好きなんだなっ!？」

「はいひっ！ 好きですっ！ 好きひいっ！ どんどんいじめてくださいいいい！」

「おうっ！」

流は無事だったブラのカップをズリ下げると、タブツとまろび出た美乳を荒っぽく掴み直した。

下着がなくなれば、十指も過剰なまでに膨らみへめり込む。

また、直に触れてはつきり分かった。

柔肌の奥には確かな張りや弾力もある。圧された部分は元の形を取り戻そうと指を押し返すし、その周りは卑猥にたわみだす。

ともすれば、媚薬のヌメリで丸ごと手から滑り出してしまいそうだ。

しかし、その儚い抵抗に誘われて、少年の愛撫には却って熱が入る。

下からすくい上げ、捻り、揉み、捏ねまくり。

確かな質感の乳首も指先で捻り上げ、思いつく全てのやり方で玩弄してやった。

クリッ、クリッ、グニニッ！

「いひううっ!? やっやっ、胸ええっ！ すごい来てますっ！ 流君の指いっ……いい

つ、ですううっ！」

葵が派手に尻を振りだしたため、亀頭がすっぱ抜けそうな疼きに苛まれる。

さらに背中も擦り付けられた。こちらは少年の乳首をズリズリ研磨だ。

もはや相手に当たる場所は全て性感帯で、美乳を包む両掌までが、むず痒くてたまらない。

「お……いいっ……俺も葵が動くつつ、身体中っ、気持ちいいっ！」

「流君もっいいっばい……っばい動いてくださいっ……！ なっ、中でイッていいですからあっ……あはああんっ、胸も子宮もめちゃくちゃにしてほしいんれすううっ！」

「お、おうっ！」

乞われた流は、崖つぶちにある下半身を弾ませた。

相手を抱きしめる体位だと、抽送は子宮口を続けざまにノックする短めのものとなる。ずっぱり埋めたところで肉竿を揺さぶり、濡れ褌の開拓もする。

とにかく腰を使うたび、極大の痺れが脳天へ突き抜けた。

限界間近どころか、すでに限界を超えて動いているようなものなのだ。イク瞬間には、頭がおかしくなってしまうかもしれない。

だが、葵となら構わない。

「あ、葵っ……葵いいっ！ 俺っ……今度こそっ、でっ、出るっ……出るうううっ！」

「うひあああんっ……わたしもおおっ！ もおっ、イキますううううっ！ いいのおお

っ！ おちんちんでジュポジュポされるのほおおっ、いひいひいっ！」

「おおおおっ！」

もはや何度目か分からない抉り上げの末、雷で打たれたような激しい法悦が、ペニスの髓を打ち抜いた。

「つあつ……くあおおおうっ！」

「ひっ……きつ……いいひっ!？」

流と葵、二人揃って身を竦ませる。

そこからエクスタシーへ駆け上ったのは、紙一重で少年の方が早かった。

「イックぐううっ！」

男根は過激に脈打ち始め、ありったけの子種を子宮にぶちまけ始める。

というよりも、枷を振り払ったスperlマガ、勝手に外へ噴き上がっていた。

ビュクビュクッ、ビュクッ！

ドプッ！ ゴプッ、ビュブブウウウッ！

ゲル状の液塊ははち切れそうだった尿道を逆撫でし、鈴口もめいっばい押し開く。痺れで官能神経が煮崩れを起こしそうなのに、加減なしの速度と勢いだ。

その分、一緒にやってくる解放感も絶大で、少年の意識は頭上高く飛び跳ねそう。熱い種付けには、葵もアクメへ押し上げられた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**